

人物図鑑

ねむろを愛する
素敵な人たち「黄金色の初日^{はつひ}に
領土問題の夜明けを期待」

北方館・副館長

清水^{しみず}幸一^{こういち}さん
(52)

太陽が水平線から顔をのぞかせ、北方領土の島々や日本本土最東端の納沙布岬を、黄金色に染めていきます。

「毎年ここで元旦を迎えますが、こんなに穏やかな、雲ひとつない初日の出は初めてですね。何か期待したくなります。」と話すのは、納沙布岬の「北方館」で、昭和59年から北方領土問題の啓発に努めている清水幸一副館長です。「日ロ間の領土交渉の進展によって、来館者数は敏感に反応しますね。来館される方々からは「頑張ってください、長い間大変ですね」と声をかけられる反面、領土問題は、地元の問題だとか元島民の問題との意識を持っている人が多いように感じます」。

北方領土問題は国民全体の問題であることを理解してほしいと訴えています。

平成4年から始まった北方

領土とのビザ無し交流事業では、ロシア人は必ず北方館に立ち寄っています。

「最初の頃のロシア人は、交流の目的を理解しないままこの地に立ち、交流の中で領土問題の存在を知り、半信半疑で交流を続けてきた様に思っています」。

昨年8月の日本漁船銃撃事件の直後に副館長が国後島を訪問した際、これまでになかったロシア人島民の反応に、ビザ無し交流が無駄ではなかった事を実感したと言います。

「私のロシア人島民の印象は、日ロ間の事に関しては、国対国のことと割り切っている風に見えたのですが、この事件に関してはその悲しみが島民の間にも広がり、両国のつながりに亀裂が出来る不安を感じている島民も多く、私達に出来ることはないかと訴える人もいたほどです」。

これまでの15年の交流は紆余曲折しながらも、着実に日本とロシア人島民の間のハードルを解消しつつあります。

目の前に広がる北方領土が返還されるその日まで、全国から訪れる人々、そして現島民のロシア人を案内し、今日も明日も、清水副館長は納沙布岬に立ち続けます。